

温室効果ガス 50%減に取り組む



滋賀県琵琶湖環境部長
西嶋 栄治 氏

滋賀県では2030年時点の県内温室効果ガス排出量を1990年比で50%削減するという意欲的な目標に挑んでいる。この背景には、2007年冬に嘉田知事が「地球温暖化問題の小さな窓」と表現した琵琶湖の異常現象に直面したことがある。

琵琶湖では、水草の大量繁茂や外来魚問題など次々と新たな課題が起きているが、中でも2007年の冬、例年より気温がわずかに1.5度高かっただけで、表層の水が冷やされ重くなって沈み込むことで底層の水と混合する「全循環」という現象が、2カ月ほど遅れ、湖底に十分な酸素が供給されない事態が起こった。湖底には、イサザやスジエビなど、いろいろな生き物が棲んでおり、低酸素化のこれら生物への影響が懸念され、場合によっては、これまで取り組んできた水質保全対策が一気に水の泡になってしまう恐れがあるような事態となった。このことは、一見、異なる事象である地球規模の温暖化問題と地域の課題である琵琶湖の環境問題が繋がっていることを実感させるものであり、私たちに、母なる琵琶湖を保全するためにも、温暖化対策への取り組みが必要との決意を新たにさせることとなった。

さて、この目標を達成するため、昨年の11月県議会において2030年温室効果ガス半減を長期目標に掲げた「第三次滋賀県

環境総合計画」を可決いただいたところであり、県では2010年度には目標達成に向けた「工程表」を策定し、その実効性を確保する「滋賀県地球温暖化推進条例」（仮称）を制定することとしている。

滋賀県には幸いにして貴重な財産がある。琵琶湖の水質保全の歴史で培われた経験や、近江商人の「三方よし」に代表される社会意識の高さといった、滋賀固有のいわば「環境DNA」が、それである。その一例として、経済界と県が協力して取り組むエコ・エコノミープロジェクトがある。本県経済界では、全国に先駆けて、早い段階から、環境と経済の両立の必要性が認識され、経済成長とCO₂排出量削減を同時に進めるためのプロジェクトが展開されてきており、長期目標達成に向けて、更なる展開が期待されている。

地球温暖化問題への対応が待ったなしの状態といわれる中で、この問題の解決には、経済界の協力のみならず、県民ひとりひとりの日々の取り組みが欠かせない。滋賀県が、名実ともに、トップ・ランナーとして温室効果ガス50%削減という目標を達成できるよう、これからも様々な主体と連携をとりつつ、温暖化対策に邁進していきたいと考えている。

Contents

■巻頭言	温室効果ガス50%減に取り組む	1
■ヨシ特集	今、ヨシが熱い	2
	ヨシを植える	2
	ヨシを刈る	4
	ヨシを活用する	6
	ヨシを伝える	7
■私の仕事	持続可能な経営～地域社会とともに～	10
■地域の特集	マンション自治会が取り組む琵琶湖の水草対策	14
■滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより	CO ₂ ダイエットコンテスト in おうみ2009	16
■財団活動紹介		18